

# 遣唐使の娘



「吉備大臣入唐絵巻」 ポストン美術館所蔵（平安時代末期 12世紀）。 後白河法皇（1127～1192）の周辺で制作されたと考えられている。 主人公は奈良時代の遣唐使・吉備真備（695～776）。 894年に遣唐使が停止されてから、時を経て平安末期に描かれた奈良時代の遣唐使船で、現存する絵画資料の中で最も古い遣唐使船の絵でもあります。

---

**喜娘** 777年の遣唐使の帰り便（778年）に亡父に代わり喜娘が乗り込む。第1船は途中で悪天候により遭難。船は二つに分断され、船首と船尾が別々に南九州に流れ着く。彼女は危うく命を取り留めた。その後の消息は分からない。

**清河** 藤原北家房前の四男。752年の遣唐使の大使として入唐する。753年帰国（第一船）便漂流し阿部仲麻呂らと共に帰国できず。759年清河の迎えの便、唐に着くも帰国は許されず、777年の遣唐使の帰り便（778年）を前にして唐で没する。

**大伴継人** 遣唐使判官。752年の遣唐副使大伴小麻呂の子。777年6月に入唐し、翌年正月に長安に入り任を終え、11月第一船で帰国しようとしたが肥後天草沖で遭難、急死に一生を得て助かった。のち諸官を歴任したが、785年9月に藤原種継暗殺の一味として捕らえられ、処刑された。

宝亀9年(778年)11月5日、小野石根を節刀副使とする第十四次遣唐使一行は、無事に唐での役目を終え、蘇州の港から帰国の途につこうとしていた。

彼ら500人余の人々が四船に分乗して、日本国内最後の停泊地五島列島を離れたのは去年の6月のことである。10日ほどの航海を終え四船とも無事に揚州や蘇州に到着したのが7月3日、さらに大運河を上り、車馬を乗り継いで、入京使節団43人が長安に到着、大明宮宣政殿で時の皇帝、代宗に拝謁したのは、年が明けた1月半ばのことであった。彼らは新年の朝賀の儀式に間に合わなかったが、そのことに代宗は特に言及せず、「安祿山の乱」の傷跡がまだ残る困難な旅を越えて、25年ぶりに海の向こうから訪れた朝貢使の一行を皇帝は歓迎してくれた。

三ヶ月余りの長安での春を岩根たちは慌しく過ごした。しかし再び長い旅を終えて蘇州に戻った彼らは、恐しい運命が待っていることを、まだ知らなかった。

「大伴様と私は、不思議な運命ですね」

喜娘と名乗る娘は、まるで懐かしい友に語るように言う。遣唐副使の大伴継人が、長安での多忙な日々の一、天皇の親書を携え、河清大人、いや藤原清河の邸宅を訪ねた時のことである。清河に天皇の言葉を伝えることは、継人に命じられた重大な任務だったが、しかしそれは適わなかった。彼は清河が既に故人となったことを、喜娘から知らされた。彼女は、清河とこの国の女性との間に生まれた娘だったのである。

「父は大伴様に会いたがっていました」

喜娘の父と、継人の父の大伴小麻呂は、奇しくも25年前の遣唐使の大使と副使として、共に海を渡った仲であった。そして、その渡海は二人の父親達の人生を大きく分けることになる。帰途、大伴小麻呂を乗せた船は無事に日本への帰還を果たすが、清河の船は難破して遙か南の安南(ベトナム)に漂着してしまい、苦しい旅の末にまた長安に舞い戻った彼は、生涯を唐の朝廷役人として生きたのである。

「大伴様のお父さまが日本へ帰られた時、ともに海を渡られた鑑真様はどうしておられるのでしょうか」

喜娘は自分が生まれる前の人のことを、まるで知人のように尋ねた。彼女は清河が長安に戻った後に生まれているはずだから、まだ20歳前後のはずである。

「鑑真和上は奈良の都で唐招提寺という寺院を建てられ、私の国の仏教の興隆に尽くされました。和上は寺の完成を見ずにお亡くなりになりましたがお弟子の方々が、今、和上の意志をついでおられます」

「父は、鑑真様のことをいつも心のどこかに置いて、生きていたようです」

日本への帰途、唐の国禁を犯して鑑真を自分の船に同乗させ、密航を助けたのは継人の父の小麻呂だった。その時、清河は唐の法を破るのを恐れて、自らの船には鑑真を乗せなかったのである。しかし...と継人は思う。もし、鑑真が清河の船に乗っていたら、彼と同様の運命に見舞われ、日本への渡海は適わなかったのではないかと。

「お父上は日本へ帰りたいたわられていたのでしょうか」と、継人が尋ねた。

「それはどうでしょう」と、喜娘は言う。

「父にはこの唐で沢山の仕事があったようですし、仲麻呂様や、唐の方にも沢山の仲間の方が居ましたから。それに.....」

それに...と言った喜娘の次の言葉は継人には分かっていた。それに、日本に帰るにはあまりにも長い時間が経ち過ぎている。

ふいに、喜娘は椅子から立つと部屋の窓を開けた。そこは見事な竹林の庭苑になっていた。竹林は春の季節の色に照らされている。その時、継人は窓の上のほうに一幅の書を見つけた。唐詩ではなく万葉歌が書かれている。継人の視線に気付いたのか、喜娘が美しい声で朗読した。

「旅人の 宿りせむ野に 霜降らば 我が子羽ぐくめ 天の鶴群」

「遣唐使を送り出す母の祈りの歌ですね。お父上が書かれたのですか」

すると、喜娘は継人の問には答えず、朗読を続けた。

「死ぬことは天の常道だが、哀しいのは遠い所であることだ。身体はもう異国の地に埋められたが、魂は故郷に帰ることを願っている.....」

「何でしょう、それは」

「これは、父のように遣唐使でやってきて、帰国することが適わずこの国で亡くなった方の墓誌に書かれる言葉なのです。父の墓には私が書いた墓誌を埋めました」

それから、ふいに振り返ると

「継人様、私を日本へ連れて行って下さい」と、喜娘は言った。

船首で主神（住吉）と陰明師が祈禱を始めた。それに合わせるように、射手が梓弓をかきならす。航路を阻む邪心を追い払っているのだ。

引きしまった空気の中で、喜娘は侍女と供にその光景を見ていた。

「危ないから、もう館の中の船室にお入りなさい」

後ろから継人が声をかけた。喜娘は最初、返礼のために日本の朝堂を訪問することになった唐の使者とともに、彼らの船に乗ることになっていたが、唐船の建造が間に合わなかった為に、使者と供に継人の船に乗ることになったのである。

「しっかりと唐の国を見ておきたいんです。もう見納めになるかもしれないのですもの」と、喜娘は振り返って言った。

音声長の打ち鳴らす銅鼓の響きとともに、船は静かに動き出した。西からの風が吹く、波穏やかな冬の海だった。しかし、順調だった航海は3日目に突如悪夢を迎えることになる。その有様は、続日本紀に残された大伴継人の報告で知ることが出来る。

『外海に達した頃の8日の初更(午後8時ごろ)に風激しく波は高くなり、左右の棚根(舷側の下)を打ち破って海水が船に満ちました。甲板は尽く流れ去り、人や荷物は波の間に間に漂い、米や水も流れ去りました。この時、副使の小野石根や唐人の趙宝英ら60人余の人々が海に投げ出され沈んで行ったが、私は海中を潜り行き、舳先の手摺りにたどり着いて、やっとの思いで助かることが出来ました』

船は大波に翻弄され、木の葉のように漂った。波の高みに突き上げられた次の瞬間には海の底に引き込まれる。大波が流されまいと必死に船板にしがみつく人々を、容赦なく襲う。そんな中で喜娘は自分の身体を船底の柱に結びつけ、必死で耐えた。乗組員は皆、為すすべもなく嵐の収まるのを待つだけである。やがて薄れていく意識の中で彼らは奇怪な形をした鳥の群れが、上空を飛び回るのを見た。また何万という蛇のような魚が、船の周りに群れるのを見た。

嵐は3日続いて、3日目の朝に雨がやんだ。

その時である。舳先の柱にしがみ付いていた船手の一人が前方の空を見て「見る、あれは何だ」と叫んだ。見ると、海の中から天に向かって巨大な水柱が吹き上がり、それはこちらに近づいている。水柱の向こうに何かが居る。

「竜だ、竜神だ！、竜神が怒っているぞ！」

「この船は竜神に飲み込まれるぞ！」

「女だ、この船には女が居る。だから竜神が怒っているのだ！」

一人が言うと、ほかの男達も騒ぎ始め、彼らは気を失っている喜娘とその侍女たちの周りに集まってきた。継人が騒ぎに気づいて男たちを止めようとした。その時である。喜娘が一人突然起き上がり、人々を押し分けて船の舳先へと進み、両手を大きく空に広げて叫んだ。

「竜神よ、海の神よ、私を日本へつれて行け！」

すると、突然、風にあおわれて帆柱が折れ、船が真っ二つに割れたのである。

『11日の五更(午前4時ごろ)帆柱が船底に倒れ、船体は二つに断られました。私ども四十余人は方一丈(約3平方米)の舳先にまつわりついて、米も水も口にすることなく、流されて行きました』

喜娘や継人を乗せた舳先の部分は、さらに海上を彷徨った末に、九州の天草に流れ着いたのは、それから二日後の11月13日のことであった。

大伴継人が、藤原種継暗殺事件の首謀者として処刑されたのは785年(延暦4年)、彼が遣唐使として喜娘を伴い、奇跡の生還を果たしてから僅か7年後のことであった。

奇しくも遣唐使として唐に渡り、帰国後、藤原仲麻呂暗殺未遂で処刑された父親と同じ運命をたどったのである。

喜娘は日本で生涯を終えたのか、唐に帰ったのか正史は伝えていない。しかし一つの伝聞が残されている。唐招提寺の北側に藤原清河の旧邸宅があってこれが唐招提寺に寄進されたが、その寄進者は喜娘だったという。

2004年、中国の西安で日本人留学生、井真成<sup>せいしんせい</sup>の墓誌が発見され、そこには喜娘が継人に語ったとおりの言葉が刻まれていた。

公は姓は井<sup>せい</sup>、通称は真成<sup>しんせい</sup>。国は日本といい、才は生まれながらに優れていた。

命を受けて遠国へ派遣され、中国に馬を走らせた。

中国の礼儀作法を身につけ、中国の風土に同化した。

正装して朝廷に立ったなら、並ぶものはなかったに違いない。

だから誰が予想しただろう。よく勉強し、まだ、それが成らないのに、

思いがけず死ぬとは

真成は、遠い国にいることをなげきながら、

夕暮れに倒れ、荒れ果てた野におもむいて、墓で悲しんでいる。その言葉に言うには死ぬことは天の常道だが、哀しいのは遠い地にあることだ。

身体はもう異国の地に埋められたが、魂は故郷に帰ることを願っている と

